

生業と居住空間の関係性に関する研究

ータイ北部S村・T村を事例としてー

Keywords

生業 農業 米倉
炊事 食事 宗教



AK11109 松 優樹

1. はじめに

1.1. 研究背景

生業一農・林・水産業を営む社会はそれに則した居住空間を組織する。農・林・水産業を生業として行う場合、生活のほとんどに生業が絡んでくる。住居の隣の作業小屋、又は室内に取り込まれた作業場、道具の保管場所など少なからず居住空間に影響を与えている。

農業国であるタイでは農耕、特に稲作が生業として卓越しており、稲作との関わりなくしては人々の居住空間の組織はないと考えられる。

1.2. 研究目的

本研究ではタイの一農村において生業が住居空間の組織にどのように関与するのかを究明する。

米の生産から食物として消費するまでの一連の過程を対象とし、水稻耕作と生産物である米を巡る人々の活動に着目し、空間との対応関係を明らかにしていく。

1.3. 調査方法

文献調査と現地でのフィールドワークを基本としている。文献だけでは得る事のできない情報を得るために実際に現地へ行きフィールドワークを行った。

①調査期間：平成26年9月15日～10月1日

②調査地：タイ

チェンライ県 S村 平成26年9月15日～9月21日

調査件数：8件

チェンマイ県 T村 平成26年9月22日～10月1日

調査件数：10件

③調査方法：各村にてフィールドワークを行い、インタビューと住居の実測を行った。

・実測調査 平面図（1/50）、屋敷図（1/200）を実測により作成した。図面には空間の構成を理解するために空間内の家具など生活物品も記入した。

・インタビュー調査 各住居の住人1人または2人にインタビューを行った。職業や年齢、家族構成などの基本情報や村又は住居単位で行われる儀式の内容、祭壇、重要とされる柱の意味についてなどと、農業が生活空間に及ぼす影響などについてヒアリングを行いデータを得た。

2. 調査地の概要

2.1. タイの概要

タイは、東南アジア大陸部の中心に位置し国土面積は約51万4000平方km（日本の約1.4倍）で、4つの国と接している。

人口は約6000万人で、民族は、タイ族が約85%、中華系が10%が居住するが、その他に山岳地帯にはそれぞれの文化や言語をもった少数民族が暮らしている。

タイ国内の9割以上は仏教徒で占められている。そのほとんどが上座部仏教である。

2.2. S村の概要

チェンライは首都バンコクから北方約780kmの位置にあり、ミャンマー、ラオスと隣接している。

調査をしたS村はチェンライ県のメーサイ郡にあり、人口は全体で約900人で世帯数は205戸である。S村にはコムアンという民族が数多く住む。

2.3. T村の概要

チェンマイは首都バンコクから北方約720kmの位置にあり、「北方のバラ」とも称される古都である。

調査を行ったT村はチェンマイ県のサンパトン郡にあり、人口は661人、世帯数は200戸である。T村はタイクンという民族の村である。

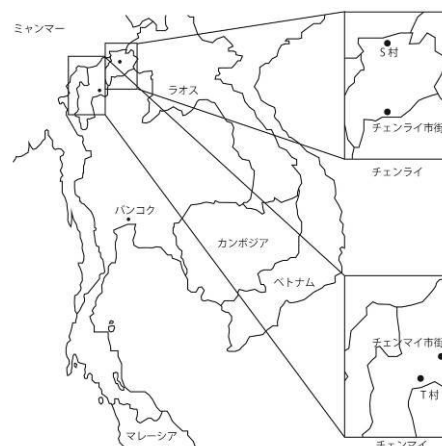


図1 調査地の場所

3. 住居について

ここでは、分析の対象となる住居と炊事空間、食事の空間について述べる。

3.1. タイの住居

タイ北部の伝統的な住居形式は木造の高床式住居である。調査した住居は地床・中床・高床式住居の3種類であった。間取りは玄関から広間・寝室・水回りの順が多い。炊事場、食事の空間は外付けの住宅が多かったが、以前は外だったがリフォームして住居内に取り入れた事例もあった。どの住居にも必ず米倉が並んで建てられている。

3.2. 炊事空間

以前は炉を使用し炊事を行っていた。しかし現在では炉は取払い、代わりにガスコンロで炊事が行われている。

以前は住居の隣に炊事場があり住居内には炊事場が無い家がほとんどだった。

3.3. 食事の場所

食事は住居ごとにそれぞれの場所で食事をしている。1階で食事をする世帯もあれば2階で食事をする世帯もある。また別棟に食事の場所を設けている世帯もあった。台所の近くで食事をするという決まりごとは無く、それぞれの考えにより、食べる場所が決めている。

北タイの伝統的な食事の仕方は、床にゴザをひき、その上にカントークと呼ばれる台を置き、その台に食べ物をのせ、カントークを囲むように座り食事を行う。

また主食であるもち米の調理方法は昔から変わらぬ方法で調理されている。

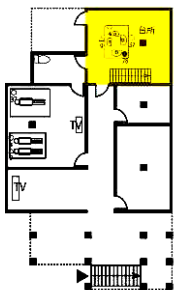


図2 食事の場所



写真1 カントーク

4. 米倉

4.1. 生業について

調査した世帯のほとんどが水稲耕作か果樹栽培を生業としていた。現在では労働者を雇って生業を行っている。各村で水稲耕作を行っている世帯は8軒、以前水稲耕作を行っていたのが5軒である。

現在では手作業では行っておらず、機械を使って作業をするのが一般化している。

4.2. 米倉について

米倉は一家の富を象徴するものとされている。米倉は渡り廊下でつなぐことは不吉とされ、主屋とは別棟に建てられるので、出入は正面の梯子のみを使う。米倉の高さは約2mで、およそ4×7mの長方形をしたものが一般

的である。内部は2つ又は3つの部屋から構成されている。部屋の周りは通路となっており、農具の置き場所となっている。米倉の大きさ、部屋の数は生業である水稲耕作の収穫量の差により変わる。

調査地で米倉を確認できたのは14軒であった。



写真2 住居番号13 米倉

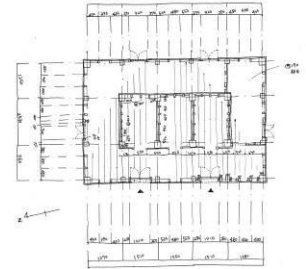


図3 同 平面図

4.3. 宗教観念にみる稲作

調査地では、宗教的観念と生業である稲作との関係も確認できた。水田の神への儀礼、新米の儀礼など、稲作に関する儀礼は多い。儀礼を行うという行為から北タイにおいて水稲耕作の大切さがわかる。



写真3 田んぼの神



写真4 農地の神への供え物

5. 稲作から食事までの空間分析

5.1. 米倉の空間と収納されるモノ

生業である水稲耕作に使う農具は米倉の内部や外部の広範囲に分布している。農具が置かれていた場所を種類ごとに図面上に数字を使いプロットした。

用途の明確でない農具以外のものや粗大ゴミなども米倉に置かれていた。農具は一箇所にまとまることなく散在している。米倉の四隅や取りやすいところ、置きやすいところに置かれている。

米倉には現在、米を保管する以外の要素がある。床上と床下空間では用途は異なっており、床上は水稲耕作に使用する農具が多く、床下は洗濯物の干し場、休憩スペースとなっていた。

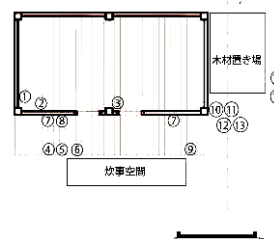


図4 米倉と農具の分布図



写真5 保管されていた農具

5.2. 農業従事者

農業国のタイにおいて、水稻耕作は人々の生活に強い結びつきがある。調査を行った18軒中13軒が現在または過去に農業を行っていた経験があり、その内11軒が米倉を所有していた。残り5軒は公務員、または商店経営。

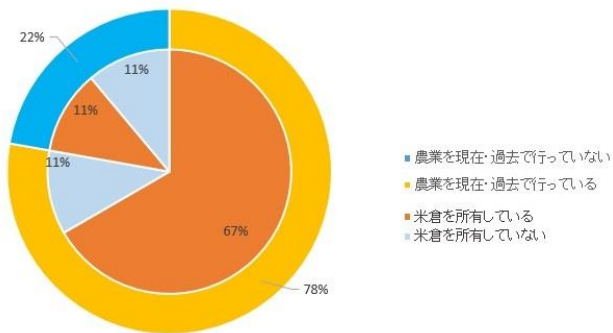


図5 農業従事と米倉保有の関係

5.3. 屋敷及び住居と米倉の関係

ここでは、米倉が屋敷及び住居に関してどのように配置されているのかを屋敷の事例ごとに分類する。

調査対象住居において米倉を保有していた住居で屋敷における米倉の配置関係は4種類に分けることができた。

- ①屋敷入り口から主な住居と米倉が同距離にある。
- ②米倉よりも主な住居が屋敷入り口近くにある。
- ③主な住居よりも米倉が屋敷入り口から近くにある。
- ④屋敷入り口が複数箇所ある。

上記の4種類で①が5軒、③が4軒、④が2軒、②が1軒となった。②の一軒を除き全ての住居で屋敷における米倉の位置は、主な住居と同列もしくは米倉のほうが屋敷入り口に近いということがわかった。

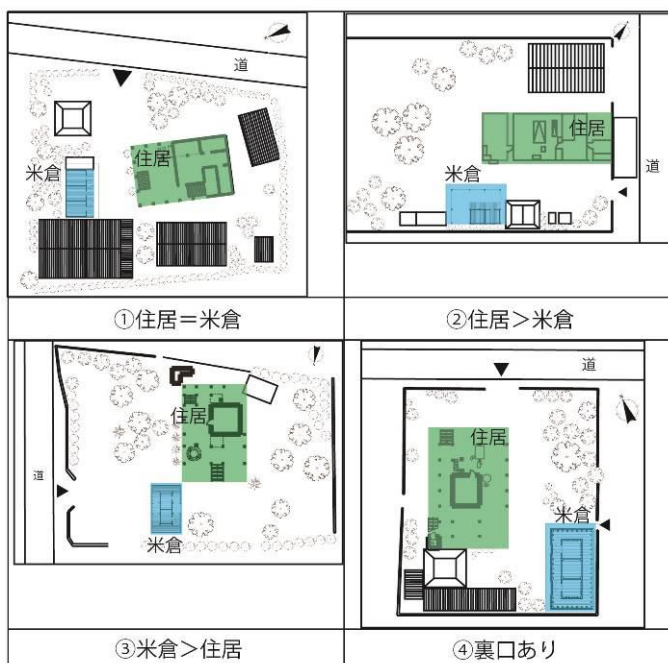


図6 屋敷における住居と米倉の位置

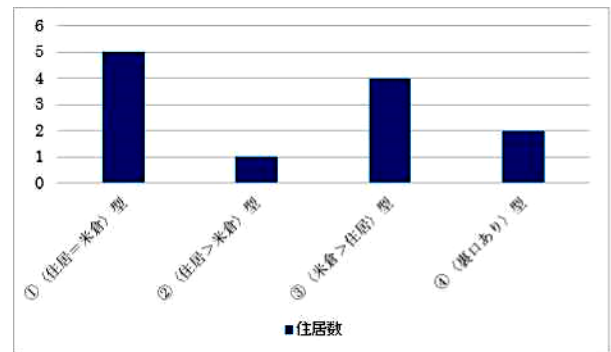


図7 屋敷及び住居と米倉の位置関係

5.4. 炊事空間について

ここでは水稻耕作で収穫した米を調理する炊事空間について住居内又は屋敷内における配置場所を分析した。

主要な入り口側を「オモテ」とし、「オモテ」と「ウラ」に分類した。調査住居18軒全てが住居または屋敷の「ウラ」に炊事空間が配置されていた。住居の「ウラ」に配置されていたのが11軒、屋敷の「ウラ」に配置されていたのは7軒となった。

以上より炊事空間は「ウラ」に配置されることがわかった。

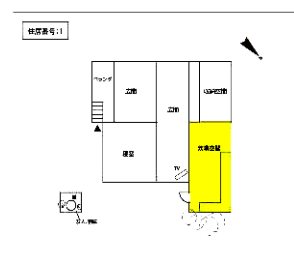


図8 住居「ウラ」

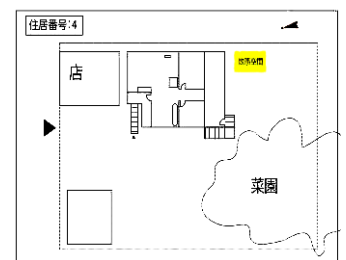


図9 屋敷「ウラ」

5.5. 食事の場所について

前項までで、水稻耕作の生産から収穫した米を調理する過程までを述べてきた。ここでは食事をする場所について以下の視点で、米を巡る人々と空間の関係を分析する。

- ①食事をする場所の屋内、屋外の別
- ②食事をする場所と炊事空間の関係
- ③「ウラ」、「オモテ」と食事、炊事の場所

はじめに、①については食事をする場所が屋内空間か、屋外空間であるかに分けた。これをアルファベットを用い、〈a-屋内で食事をする〉、〈b-屋外で食事をする〉と表現する。以下同様にアルファベット記号を用い細分化していく(図10参照)。

②については食事をする場所と炊事を行う空間が同室かどうかについて分析し、〈a-炊事空間と同じ場所で食事を行う〉、〈b-炊事空間と異なる場所で食事をする〉の2種類に分類する。

そして、炊事空間と食事の空間の相互関係を示すために前項で述べた「住居ウラ」と「屋敷ウラ」と食事の空間については③で、住居または屋敷における炊事空間の

「ウラ」と食事を行う場所の屋内、屋外との組み合わせを用い、4種類に分類した。〈a-「住居ウラ」+「屋内空間」〉、〈b-「住居ウラ」+「屋外空間」〉、〈c-「屋敷ウラ」+「屋内空間」〉、〈d-「屋敷ウラ」+「屋外空間」〉の4種類に分類した(図10参照)。

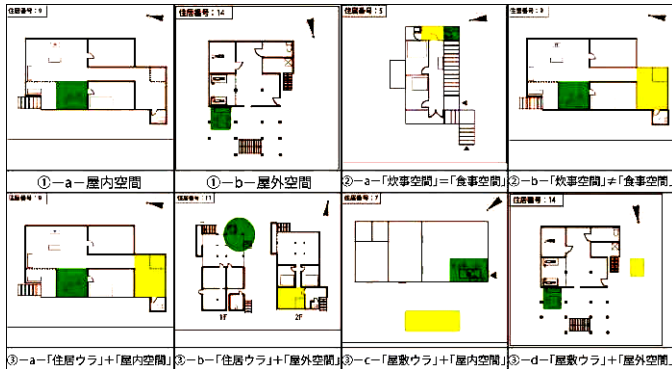


図10 炊事空間と食事空間の分類

表1 食事の位置と炊事空間の関係性

住居番号	食事の場所			住居番号	食事の場所		
	①	②	③		①	②	③
1	a	b	a	10	a	a	c
2	a	b	a	11	b	b	b
3	a	b	c	12	b	b	b
4	b	b	d	13	a	a	a
5	a	a	a	14	b	b	d
6	a	b	c	15	a	b	a
7	a	b	c	16	a	b	a
8	b	a	d	17	a	a	a
9	a	b	a	18	a	a	a

上の表より①、②、③の形式で一番多いのが〈a-b-a〉型で5軒、次いで〈a-a-a〉型で4軒、順に〈a-b-c〉型が3軒、〈b-b-d〉型、〈b-b-b〉型が共に2軒、〈b-a-d〉型、〈a-a-c〉型が共に1軒となった。

6. 考察

6.1. 米倉の位置づけに関する考察

水稻耕作は農業が盛んな北タイにおいて生業として卓越しており、実際に調査を行った世帯13軒でも米倉を確認できた。屋敷の中でも住居より米倉が入り口に近い、または屋敷の中で米倉への距離が住居と等しい世帯が9軒であった。これは住居を形成する上で、最初に米を保管する場所を重視することを示す。村の外にある水田から住居へ米を運ぶ際に、屋敷内で入り口から一番近いところに米倉を建てると都合が良い。

また現在では水稻耕作は高齢化により減少しつつあり、米倉は物置場などになっていることもある。しかし、実際には米倉内部には農具が数多く保管されており、水稻耕作を行わなくなった世帯においても、農具を保管している。

6.2. 炊事空間及び食事の場所の考察

米倉が屋敷の入り口側に配置されているのに対して、炊事空間は住居内、又は屋敷内で裏側に配置されており、炊事専用の空間が一室ある住居が多い。

食事の場所は、炊事空間とは別の場所に運び、食べて

いる世帯が多い。その理由として、住居内で一番風通しの良い場所で食べるという意見が多かった。収穫した米は住居内の「ウラ」の炊事空間で調理され、さらに住居内で別の場所に移動して食べられるのである。以上をまとめると、稲の育成、米の保存、調理、食といった一連の過程を空間に表現したものが北タイの住居とその屋敷なのである。

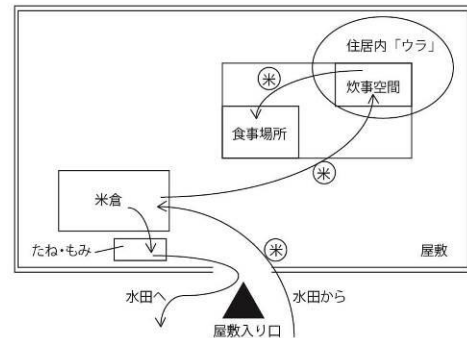


図11 住居のモデル図

7. おわりに

本研究は生業が住居空間の組織にどのように関与するのかを探るために、北タイにおいて稲と米を巡る人々の活動に着目してきた。

住居の空間構成を決定する要素として、大きく3つの要因があると考えられる。1つは「屋敷における米倉の配置」である。住居から離れた位置にある水田から、米を住居まで運ぶ際、屋敷入り口から住居よりも近い位置に米倉が配置されている。屋敷内で住居の配置を決定する際に「米倉」の場所が大きく影響している。「屋敷における米倉の配置」は水稻耕作を行う上で重要なのである。

2つめの要因は「炊事空間の配置」である。炊事空間は「ウラ」に配置される。

3つめの要因は「食事空間の配置」である。炊事空間とは別の場所で屋内、または屋外において各住居の風通しの良い場所を選んで食事をする傾向が多い。

S村、T村それぞれで民族は違うものの、米倉の配置、炊事空間の配置、その米を食べる場所と、それら全てを含んで成り立つモデルをしめしている。水稻耕作を行う人が減少しつつあるものの、主食である米を食べるといふ行為は北タイ人にとって不変のものであり、米を巡る人々の生活はこれからも続くのである。

参考文献

- 1) 廣瀬貴之 寺内美紀子 窪谷浩之
『農業集落の要素と変遷：関東平野部の農業集落におけるランドスケープの構成形式(1)』日本建築学会大会学術講演梗概集 pp357-358 2010年
- 2) 深澤ひかる 清水郁郎 『モノからみる台所：奄美大島における住居空間とモノの現在の様態 その2』日本建築学会大会学術講演梗概集 2011年
- 3) 田中麻里 『タイの住まい』2006年2月28日